

<講演抄録>1. 某高等専門学校の1975~1987年度男子学生における齲蝕有病状況の検討(第12回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	千葉 潤子, 高橋 紀子, 島田 義弘
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	7
号	1
ページ	89-89
発行年	1988-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/31280

第12回東北大学歯学会講演抄録

日時：昭和62年11月21日（土）午後 1:00～3:00

場所：東北大学歯学部 B 棟第一講義室

— 一般演題 —

1. 某高等専門学校の1975～1987年度男子学生における齲蝕有病状況の検討

千葉潤子，高橋紀子，島田義弘（予防歯科）

1975～1987年の各年の5～6月に，仙台市近郊の某高等専門学校生について定期歯科検診を行い，その成績から年齢別齲蝕有病の年次推移を検討した。調査対象は15～19歳の男子生徒1,368名で，視診型による歯面別齲蝕診査を行った。年齢別に同一対象のDMFT数及びDMFS数を各年度ごとに算出し，次いで，年齢別齲蝕傾向線図を作成，回帰分析による統計学的検定を行った。結果は以下のとおりである。（1）1975年度19歳のDMFT数とDMFS数は7.74と16.53であり，1987年度の各々は10.30と20.00となり，いずれの年次推移にも統計学的に有意な正の一次回帰が認められた。18歳のDMFTにおいても同じ傾向にあったが，それ以外の年齢の齲蝕指数には有意な直線性を認めなかった。（2）齲蝕量に大きな年次変動がみられたので，それを小さくするため，3か年移動平均法を用いて再度平均DMFTとDMFSの傾向線を作成したところ，18，19歳のDMFTを除いて15歳男子は1979年，16歳は1980年，17歳1981年，18歳1982年，19歳は1983年とそれぞれにピークが観察された。そこで，ピークを境に前後の2期に分け，各期について回帰分析を行ったところ，（a）15歳における1976年のDMFT数とDMFS数は各々6.25と11.30であり，ピークの1979年のそれは7.54と14.03へと増加し，有意な正の直線性が認められた。ピーク以降は減少へ転じ，統計学的に有意な負の直線性が認められ，1986年には6.95と12.33となった。17歳のDMFSの傾向線においても1981年をピークとして同様に統計学的有意性が存在した。（b）16，17歳のDMFT及び18，19歳のDMFSはピーク前に正の有意な直線性が認められ，16歳のDMFSはピーク以後に有意な直線性が存在した。以上から，本対象においては，15歳のDMFTと15歳と17歳のDMFSの傾向線に統計学的に有意

なピークの存在が認められ，その他の年齢群においてもその傾向が存在したことから，ピークを境に今後減少する傾向にあると考えてよいと思われた。

2. 高圧蒸気滅菌に伴う歯科用タービンの特性変化 玉澤かほる，石幡浩志，堀内 博（歯科保存1）

B型肝炎，ATLおよびAIDSなどの感染者の増加に伴い，歯科の分野でも万全の院内感染対策が求められており，これまで構造上，あるいは経済上の理由から消毒がなおざりにされてきた歯科用タービンハンドピース（以下THPと略す）に対しても患者一人毎に滅菌する必要性が出ている。そこでTHPの性能が滅菌処理によってどの程度影響をうけるのかについて検討した。試料は現在オートクレーブ滅菌が可能であるとして市販されている7社のTHP8本であり，歯科用高圧蒸気滅菌器にて121℃にて15分間加熱処理を行った。処理の前後にはメーカー指定のオイルを注油した。THPの性能は回転数（非接触型デジタル回転計）および回転音の周波数特性（スペクトラムアナライザー）にて評価した。その結果，1. 滅菌前のTHPについて，メーカーが指定する圧を中心として上，下に2および4psiに変化させたときの回転数の変化を検討したところ，大部分のTHPでは空気圧が高くなるにつれ回転数が上昇した。しかし，一部のTHPにおいては圧力が上がると回転数が下がる場合もあった。滅菌前，滅菌5回，25回，50回，100回後の回転数の推移をみるとAのTHPでは滅菌回数を重ねても著明な変化はみられなかった。BのTHPは滅菌回数が増加するにつれ回転数が減少する傾向がみられ，CのTHPは変化が不規則であり，DのTHPは滅菌回数が増大すると回転数が逆に上昇する傾向が認められた。EのTHPは著明な変化は認められず，FのTHPは変化が不規則であり，GのTHPは回転数が上昇する傾向が，HのTHPはやや低下する傾向が認められた。また，滅菌前と滅菌100回後の回転音のパワースペク